

## 〈巻頭言〉

京都女子大学学長 土川 眞夫

平成 16 年度に向けての本学の改革にあたって、建学の精神にかなう新しい学問の創造をめざした新しい学部、学科を構想するとき、すでに何年にもわたって学内で静かな話題であったこともあるが、福祉に関わる学科の新設は自然のことであった。少子高齢化のますます進む今日、豊かで安定した社会と生活を維持向上していくためにも、高齢者介護の問題は避けて通れない重要課題の一つである。このような状況のなかで、生活福祉学科を家政学部の中での新設をみたことは時を得たことであったと思う。

生活福祉学科は、高齢者介護・福祉について、これに貢献する人材の養成とともに、そのさらなる発展を目指した研究を行う学科である。学科の発足にさいして、介護問題を制度的視点よりも、家族・家庭のなかに中心があるべきだとする「生活者」の視点での考えを持ったことは重要である。そのとき福祉学は家政学の考え方、食物栄養、住居、衣料など家政学各部学科の教育・研究との繋がりは明瞭になってくるが、まさに家政学の諸学問を総合化のなかで、一つのコアとしての生活福祉学である。この学科はその意味では家政学のいう「人類の福祉に貢献する総合科学」の重要な一端を担う存在である。

また介護についてさらにいえば、社会制度的、技術的なものとともに、精神的なものへの対応へと、内容の幅の広さと深さが求められている。なかでもこの方面の指導的人材の育成を目指すこの学科にあっては、専門的知識や観察力、洞察力、判断力などさらに高度の能力をもつ人材が育たなければならない。育つべき人たちがその能力を身につけるためにも、人の生涯についての深い自覚と理解をもち、介護の現場から社会への働きかけの出来る力を持つことが肝要である。ここに専門性とともに教養人たらんことを重んじる大学ならでの生活福祉学の教育・研究の意味があると考えられる。

とにかく人が生まれ、育ち、老いるのは「家族」のなかでなければならない。ここ 100 年、家族の形態の変化が著しいのは実感することではあるが、「家族」の持つ意味の重さは変わらない。若い人々が明るく自然な態度で家族・家庭を考え、如何に作っていくのかを模索することは、これから生きる人として必要なかつ欠くべからずのことである。これは全学の教育の問題ではあるが、生活福祉学科の果たすべき役割も大きいことを思い、今後の展開に大いに期待したい。